

有限会社安久工機

できることを「尽くす」という 取り組みの一つに知財がある

ニッチな分野で、付加価値の高いさまざまな製品づくりに寄与。アイデアが決め手となる試作品や特注品の製作をメインとし、扱う材質も、鉄・非鉄金属、プラスチック、ゴム、木材と幅広い。経済産業省が選ぶ「世界トップレベルのベンチャー企業7社」にも選定された実力を持ち、多くの企業や大学などからの「こんなものをつくってほしい」という声に答えている。

主な権利

2010年：特許 第4435891号
2012年：特許 第4887228号
2014年：特許 第5410789号
2014年：商標登録 第5653837号
2014年：商標登録 第5677348号

会社概要

所在地：東京都大田区下丸子2-25-4
電話：03-3758-3727
URL：http://www.yasuhisa.co.jp
業種：医療機器・精密機器・一般産業機器
試作品などの設計・製作
設立：1969年（昭和44年）
資本金：1,000万円



代表取締役社長：田中 隆さん

「ものづくりの便利屋」であり 信頼の絆で結ばれた会社

自らの会社のことを「ものづくりの便利屋」と称するのは、田中社長。1969年創業の父親の後を継いだ、2代目である。有限会社安久工機では、「ひと工夫加えた試作品づくり」をモットーに、多岐にわたるアイデアを形にし、付加価値の高い製品づくりも行っている。そのベースにあるのは、顧客の目線で、顧客が満足するものを提供するという誠実な姿勢であり、信頼の絆で結ばれた仲間も多い。同社が設計したものを加工する作業においては、地元大田区を中心とした50以上の加工会社の協力を得ているほどだ。

そんな同社が活躍する分野は、本当に幅広い。「パタコーン」は、その名の通りボタンと折り畳んで収納のできるカラーコーン。コンパクトで収納に場所を取らず、警察や工事関係者などをはじめ多くの人に喜ばれている。

さらに、人工心臓の世界でもアイデア力や技術力を発揮。早稲田大学からの依

頼を受けてプロジェクトに参画し、10年以上の年月を費やして開発と医療の進歩に取り組んでいる。

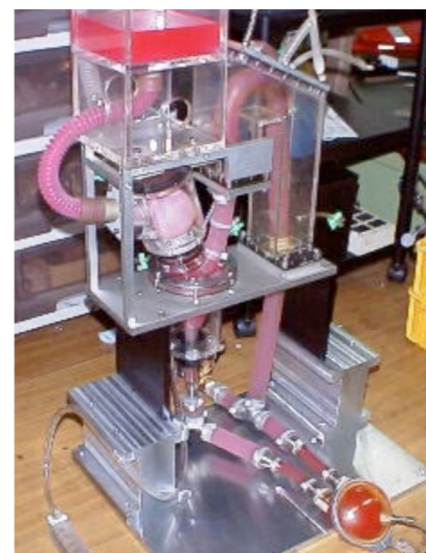
見えなくても絵を把握できる 想いのこもった触図筆ペン

さらに、新しい世界への挑戦もあった。それは2004年、一通のFAXから始まったものである。「筆先から溶かした蜜蝋が出る絵筆を作ってもらえませんか？」それは、香川県の盲学校で美術を教えている、ある一人の先生からの依頼だった。

なんとかして、この声に応えたい。視覚に障がいのある子どもたちが、絵を描く時、蝋の凸凹を触ることができれば、自分が描いた絵画の全体像を把握できる。「この土地で町工場を始めた父の口癖は『不可能を可能にする』でした。私は、困っている人を見たら放っておけない父の性格を譲り受けているのかもしれない」と語る田中社長。たいへんな試行錯誤を重ね、香川県の先生との間で交わしたメールは数百通にも及んだ。

そして完成したのが、触図筆ペン。アルミ製の筒をフィルム型のヒーターで包み、ヒーターで溶けた蝋が筆先から出るしくみになっている。温度センサーが温度の上昇を抑えるため、安全性も確保。ペンを使って紙に字や絵を描くと、15秒ほどで蝋が完全に固まり、自分が描いたものを触って確認できる。もし描き間違ってもヘラで削ることができるため、修正も可能だ。

この触図筆ペンのワークショップで、ある視覚障がい者の青年が、自分も描きたいものがあると名乗り出た。画用紙を渡すと、このペンで「お誕生日おめでとう」と描いた。誰に渡すのか尋ねると、「お母さんにです」という声が返ってきたという。「その青年は、うれしそうに何度も自分の描いた文字を手でなぞり、画用紙を大切にカバンにしまっただけ帰って行きました。うれしかったですね」と、田中社長は笑顔で語る。「手で見ると」と喜びと感動は、きっと無限大の可能性とともに広がっていくのだろう。



機械式血液循環シミュレーター。血液の流れを模倣的に試験できるシミュレーターである。



「パタコーン」は、コンパクトな折り畳み式のカラーコーン。スプリングの働きで簡単に開閉できる。第13回警察装備資機材開発改善コンクールで、警察庁長官官房長賞を受賞した。



最初に開発した「Lapico」を使って、香川県の盲学校の生徒さんが描いた作品。



「2012年に発売された視覚障がい者向けの筆記具「Lapico（ラピコ）」。東京都から、福祉のまちづくり功労者として知事感謝状が授与された。

アドバイスを受けながら 自社の力による商標登録へ

知財センターの城南支援室を最初に訪れたのは、2011年のこと。「装身具留め具」や「柿の皮むき機」の実用新案や特許など、知財全般にわたる相談を行った。

そして前述の触図筆ペンの商標登録についても相談した。「デザイン担当者たちが開発中に「Pico（ピコ）」と呼び始め、気に入っていたので、それにしようかと考えていましたが、文具において先行登録があることを知りました。そこで可愛い音色を残しながらもオリジナリティのある「Lapico（ラピコ）」という名前にしたので」と田中社長。このネーミングで、2014年3月に無事に登録することができた。それまでは特許事務所に申請の書類づくりなどをすべて任せていたが、自社で書類を作成し、登録に至るまでの一連の過程で、商標権の考え方について、社員も含めてしっかりと学ぶことができたという。

既存の特許に抵触しないかも 効率的に調べることができる

2013年からは知財センターによるニッチトップ育成支援を受け、申請の段取りや検索方法、特許の整理のしかたなどを教わり、社員への知財に対する啓蒙を行うこともできた。

「アドバイスのおかげで、既存の特許に抵触するかどうか、効率よく調べられるようになったのは大きな進歩でした。父の代から、私たちのような町工場と言えど、大きな会社の言いなりになるのではなく、しっかりと知財を確保しようという方針でやってきています。そうした考え方を一歩進めるためにも、知財センターからの丁寧で分かりやすいアドバイスは、とてもためになりました」

急な事態に対処するためにも 自社における知財管理が必要

思わぬ出来事もあった。今までずっと信頼し懇意にしていた特許事務所が、事情によって畳まざるを得なくなったのだ。「そんなことも起きてしまうのだと驚きました。ですから、日頃から知財管理をすべて人任せにするのではなく、自社で管理する必要性を改めて感じましたね」人の役に立つものをつくりたいという想いを、いつも大切にしてきた。だから会社を表す漢字は「尽」であるという。「出し惜しみせずに、やれることはやり尽くす。それで納得もしますから、常にそう心掛けています」と田中社長。知財に対しての心構えも、できる取り組みを「尽くす」ことの一つなのかもしれない。

知財
センター
から

先行登録などの情報を知っておくことが大切

触図筆ペンの商標登録におけるアドバイスをはじめ、医療や農業など幅広い分野の発明品における特許権利化のお手伝いをしました。商標登録では考えていたネーミングが先行登録されていたため、別名で出願して登録。知財では事前にしっかりと情報を入手して、ルールの中で社会と適切に関わる必要があります。東京都知的財産総合センター